

東京專門學校
教育科 國語講義錄
哲學概論

波多野精一

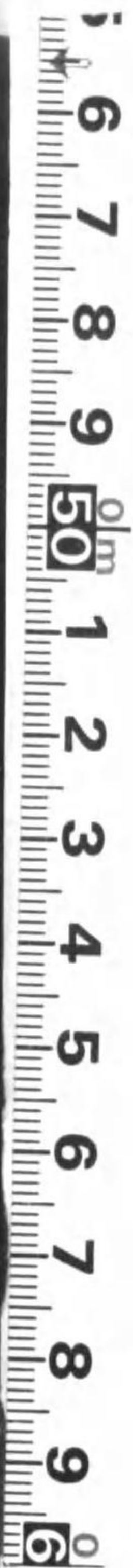
62-388



1200701679826

62

388



始





哲
學

概
論

文學士 波多野精一 述



東京專門學校出版部發刊



哲學概論目次

緒論	物理學と形而上學……………	一頁
第一編	經驗的立脚地Ⅱ物理學體系……………	七
第一章	空間……………	七
第二章	時間……………	七
第三章	物質……………	八
第四章	因果……………	九
第五章	自然力……………	一三
第六章	唯物論は經驗的世界觀の歸結たり……………	一六
第七章	經驗的世界觀の慰藉なきこと……………	一七
第二編	卓絶的立脚地Ⅱ形而上學體系……………	二〇
第一部	認識論……………	二〇
第一章	豫論……………	二〇

第二章	直觀的認識の問題	二二
第三章	世界はわが表象なり	二三
第四章	事物は其身軀に於ても吾が表象する通りの儘なるか	二五
第五章	表象の先天的及後天的要素	二六
第六章	表象の先天的要素發見の程	二八
第七章	先天的要素 II 空間、時間及因果	三〇
第八章	空間は先天的直觀形式なり	三一
第九章	時間は先天的直觀形式なり	三五
第十章	因果は先天的直觀形式なり	三九
第十一章	經驗的及卓絶的立脚地	四四
第十二章	經驗的實在	四九
第十三章	悟性の二様の用法	五二
第十四章	物質を卓絶的立脚地より考察すれば何ぞ	五二

第一部附録

理性を論ず

第十五章	序説	五五
第十六章	概念の起原及本質	五六
第十七章	概念の結合	六〇
第十八章	理性は特殊の生理的器官を有するか	六三
第十九章	提要	六六
第二十章	人間と動物	六七

哲學概論序

一、こゝに余が講述せんと欲するは、シヨールペンハウエルの立脚地より論じたる哲學概論なり。哲學を講ぜんとには或一定の立脚地よりせざるべからず、而してシヨールペンハウエルの哲學は、興味深きと共に有益に、深遠なると共に着實に、古來の大宗教と深き同情を有すると共に又自然哲學とも親密に、且つ最近の体系中最も勢力ある者の一なり。是余が自身の未熟なる哲學觀を開陳するを避けて、彼れを紹介せむと欲する所以なり。

一、余は一八九〇出版のドイッセン氏著、形而上學綱要第二版を以て本講義の土臺とせり。氏はシヨールペンハウエルの熱心なる奉崇者にして、學古今東西に通じ、殊に印度の宗教及哲學に關して有益なる著書多し、現時キールに教授たり。右の書及シヨールペンハウエル自身の著書の外、余は哲學史の大家クルーネー、フィッセル氏の偉著、近世哲學史の第九卷、シヨールペンハウエル、其生涯、著書及學說（一八九八第二版）と昨年の出版にかゝる、フォルケルト氏の「シヨールペンハウエル、其人格學

説及信仰とを參考せり。

明治卅四年十月



哲學概論

文學士 波多野 精一 述

緒論 物理學と形而上學

〔一〕 事物の理を究むるに吾等は二個の立脚地を取るを得、されどそれ以上は取るを得ず。それら二個の立脚地とは何ぞや。經驗的 (empirical) 及び卓絶的 (transcendental) 即是なり。

吾等が事物を吾等に現はる、儘に換言すれば吾等の認識能力に映ずる儘に見て居る間は吾等は經驗的立脚地に立てるなり。而して其の成果は廣義の物理学なり。これと異りて吾等若卓絶的立脚地にては、吾等は事物はそも其自身に於ては何なるか、換言すれば吾等の認識能力に映ずる通りの姿を離れて即ち吾等に現はる、其現はれ方には頓着なく、其自身に於ては何なるか、——の疑問を發す。而

して其の解答其の成果は形而上學(metaphysics)なり

〔二〕 吾等の一切の知識は知覺(perception)より始まる其の知覺には外的、と内的とあり。是等兩様の知覺は吾等に事物に關する表象(Vorstellung 獨逸語)を與ふ。其等表象の總躰は吾等之を經驗(experience)と稱す。經驗的の見方も卓絶的の見方も共に經驗より發する點は同じ、されど其の取る路は異れり、從て歸着する點も亦異れり。

こゝにいふ表象は英語にて idea といひ觀念と譯し來れる者と同一、されど idea はまた理想の意にも用ひ從てそれと混同し易きより近來は多く表象の語を用ふるに至れり。表象の代りに寫象の譯語を用ふる人もあり、

〔三〕 經驗的又は物理學的の見方は、經驗の材料を與へられたる者として受取り、さてそれを細大漏さず研究し秩序立て、排列し、かくして物理學的の體系(System of physics)を造上ぐる者なり。さればその體系は、外的經驗及内的經驗より生ずる一切の學問即ち科學を包含する者なり。

外的經驗によりて吾人の知合ひになる者は物躰なり、即ち空間及時間中にある物質なり。空間的及び時間的關係を究むる者は數學なり、物質の變化を尋ぬる者

は自然科學なり。自然科學は二類に分る。第一類なる形態學(morphology)は物質の形態を考察するものにして、礦物學、植物學、動物學之に屬す。第二類なる究因學(etiology)は物質の變化とその變化の原因とを考察する者にして、物理學、狹義の化學、生理學之に屬す。——内的經驗に關する學問は經驗的(心理學)なり。さて心理學は内的現象のあらゆる領分を以てその對象となし、從て認識、感情及び意欲のあらゆる領分に關するが故に吾等は論理學、及び文法學と美學と倫理學とにそれを分類し、さて又た是等の三科學の領分に屬する例證の集録やうの者として、つぎに科學史と美術史と萬國史とを附屬せしむるを得可し。

〔四〕 さて外的經驗といひ内的經驗といひ、又たそれ等を基礎とせる經驗的科學といひ、畢竟吾等の意識中の表象に過ぎず。この事實に着眼するは即ち卓絶的又は形而上學的の見方なり。一たび此に想ひ到らんか、然らば吾等の表象の形を離れたる其自身に於ての事物、換言すれば物、其自(things in themselves; Dinge an sich)の用ひたる獨逸語は何ぞ——との疑問は勢ひ起らざるを得ず。この疑問に答へんには、吾等は先づ手始として經驗を分析し、何れの部分が先天的なるか、換言

すれば何れの部分が一切の内的及外的知覺に先ちて吾等に存じ從て吾等の智力の本有的官能に屬するか、——又た何れの部分が後天的所有に屬するか、換言すれば何れの部分が吾等の内外の知覺によりて受け得たる者從て物其自の本質に屬すと考へねばならぬ者なるか——を決斷せざるべからず、手短にいへば經驗に於て吾等の智力より來る部分と物其自より來る部分とを甄別せざる可らず。さてかくして得たる成果とその成果を自然美術及び人間の行爲に應用したる者とは合して形而上學の體系を成す。その體系は物理學の爲し能はざる者を補ひ、實に吾等自身及世界に關して吾等の闡明し得る眞理の頂上點なり。

先天的は羅旬語 a priori 後天的は a posteriori の譯語なり。言葉通りには「先より及後より」の義なり。兩語とも古と今とにては痛く其の意を異にす。中世哲學及び近世哲學の初期に於ては原因よりその結果に及ぼす認識を先天的認識といひ、逆に結果より原因に及ぼす者を後天的認識といひたり。カント(一七二四—一八〇四)が——尤も彼より先に彼れと同意義に用ひたる者一二あれど一般の注意を呼ぶに至らざりき——現に角カントが兩語を異りたる意義に用ひてより、哲學界一般の採用する所とはなりぬ。その新意義によれば、先天的は經驗より獨立の意、後天的は經驗より來るの意なり。この本文に用ひある者は勿論その新意義の者なり。

〔五〕 形而上學的眞理は古より單に哲學の形にて現はれしのみならず又宗教の形に於て現はれたり。而して印度、希臘、及基督教の世界は實に不朽の眞理の豊富なる開展をなせり。然ども今より百年前迄は物理學的認識と形而上學的認識との區別兩者の立脚地の差異(上來論述せる)の明なる意識を缺き、經驗的立脚地に在りて形而上學的眞理を講ぜんとせしかば、其の論述勢ひ譬喩の形を取り、又た相互に矛盾するが如き觀を呈するのみならず、物理的科學とも矛盾の姿を現はすに至れり。カント(Kant 1724-1804)の「純粹理性批判」(Critique of pure reason, 1781)は卓絶的立脚地を發見し、完全なる學問的哲學的形而上學の土臺を置けり。この土臺の上に Schopenhauer (Schopenhauer, 1788-1860) は比類なき形而上學體系を建設せり。自然科學、哲學及宗教間の矛盾は素誤解に基づく者にして、各が自個の領分を意識せざりしより起りし者なり。

哲學の語は古來種々の意に用ひらるれど大凡をいへば、最狹義に於ては學問的宗教的と區別して形而上學のことなり、宗教の形の形而上學は單に宗教といふが故に、單に形而上學といひてこの狹義の哲學を意味するを普通とす。

稍廣義には形而上學とそれに密接の關係を有する、内的經驗の科學論理學、美學、倫理學とを合せて之を哲學といひ。最廣義には一切の科學の主要の成果を最も普遍なる立脚地より手廣く集めたる者をいふ。

（五） 命題。空間は何れの方向に向ても無限なり。證明。若然らずとせんか際限なかるべからず。その際限は物躰なるか或は空虚ならざるべからず。さて前者は充實せる空間にして後者は空虚なる空間なり。孰れにして矢張り空間なり。其故に空間は何等の際限をも有することなし。

第一編 經驗的立脚地 物理學躰系

第一章 空間

（六） 命題。空間は何れの方向に向ても無限なり。

證明。若然らずとせんか際限なかるべからず。その際限は物躰なるか或は空虚ならざるべからず。さて前者は充實せる空間にして後者は空虚なる空間なり。孰れにして矢張り空間なり。其故に空間は何等の際限をも有することなし。

（七） 系説。一切の存在する者は必然的に空間中に存在す。何となれば若空間中に存在せずとせんかその物はいづこにも存在せざるべく、從て全く存在せざるべければ也。

第二章 時間

（八） 命題。時間は兩方向に向て無限なり。

證明。若然らずとせんか始か終かを有せざるべからず。換言すれば始まるときか終るときかを有せざるべからず。而して兩者共なほときなり。從てまへと

あととを有せざるべからず。従て矢張り時間中にありその外には在らず。其故に時間は前後に何等の制限をも有することなし。

〔九〕 系説。一切の生成する者は必然的に時間中に生成す。何となれば若時間中に生成せずとせんか、その物はいつにも生成せざるべく、従て全く生成せざるべければ也。

第三章 物質

〔一〇〕 命題。空間及時間中には物質の外何物も存在せず。

證明。(一)空間及時間中にはたらく者け之を物質といふ。存在すとは空間及時間中にてはたらくの謂なり。其故に一切の存在する者は物質的なり。(二)存在せりとして考へらるゝを得る者は之を可能的といふ。物質的なる者のみ存在せりと考へらるゝを得(吾人は物質的ならぬ者は存在せりと考ふる能はず其故に物質的ならぬ者は有るを得ざる也換言すれば不可能なり)。

〔一一〕 命題。物質は創造せらるゝことも又絶滅せらるゝこともなし。

是の命題は自然科学者の實驗によりて證明せらるゝに非ず。今假りに——随分

困難の事たるのみならず殆んど不可能の事なるに拘らず——吾等が手に秤を携へて物質のあらゆる變化を追跡し得とするも、科學の實驗は單に、今迄は物質の量を増減する能はざりきといふを示すに止りて、物質といふ者は一昧決して量に増減ある能はざる者也といふ事は示さざるなり。この命題は寧ろ一切の知覺より雜れて、先天的に次の通證明するを得べし。物質の生起も消滅も共に考ふることだになし得ず(可能ならず)さて可能ならぬ者は現實的ならぬは勿論なり。其故に命題の通り。

〔一二〕 世界にある物質の量は際限有るか無きかのいづれかなり。さて際限なき時は無限の空間に應じて無限大なるべく、際限ある時は無限の空間に比して無限小なり。

第四章 因果

〔一三〕 實、躰(substance)は常住す(見一)をされどその性質、形、状態は絶えず變化す。

(希臘哲學者ヘーラクリイ)是等一切の變化は次の法則に従て必然的に起る者なり。

〔一四〕 因果律。曰物質の變化はいづれを取も皆結果にして原因と稱する他

の變化が先ちて起りし後始めて起る者なり。而して結果は原因に規則正しく又た屹度、換言すれば必然的に繼起する者なり。

〔二五〕 結果はそれに先ちて或一定の状態に變化(即原因)が生じたる後始めて起る者にして其一定の状態は他の多の變化の結果なるが廣義にはかの最後、に起りし變化に、この状態多くの變化の結果なるこの状態を合せて原因の名を與ふ。

その時には吾等は原因中に種々異りたる原因的、原素或は制約(conditions 條件といふも妨ない)を區別す。それらの制約の順序はいつも同なるにはあらず。

今こゝに一塊の火藥ありとせむ、其の發火せん爲めには熱を加へざるべからず然るにこの熱を加はるといふことはそれに先立つ或變化ありて始めて起るなり、その變化を例へば日光の凸レンズに當りたることとせよ、この變化は例へば日光を遮りし雲の飛散によりて、而してこれは更に風によりて惹起されしとせよ。この場合に於て狭義には熱の加はるといふ變化が發火の原因たり。然れどもなほよく考ふればその變化のみが唯一の原因なる權利を有せざるなり。今假りにこの場合に於て雲飛散せざりきとせんか發火の現象亦有るを得ざりしなり。其故に上に舉し諸々の變化は發火てふ現象の起る條件(制約)としては同等の權利を有す。故にそれらを包括して原因と稱するをむしろ一層適切とす。さればこの廣義の原因は數多の原因的要素即制約を含有する者なり、又それ等の制約に必しも常に同順序にて起るを要せず。雲はれて日光が

物鉢に當りたる後にレンズを持行くも、又先に持行しレンズに後より雲はれて日光當るも結果に於て差異なし。

〔二六〕 同心原因は常に同心結果を有す之に反して同心結果は異りたる原因より起るを得。従て結果より原因に移るは不確に、原因より結果に移るは確かなり。第一の路は假説(hypothesis)の路にして、第二の路は實驗の路なり。

〔二七〕 因果律の直接の歸結(consequence)として——(一)原因なき處には結果亦無し是即ち惰性律(law of inertia ニエー トンの運動の第一即ちなり。——(二)因果律は單に物質の状態にのみ應用すべき者にして一切の状態形、及性質を擔ふ所の實鉢に應用すべからざる者なり。是即實鉢常住の法則なり。

〔二八〕 空間(見六)と時間(見八)とが際限なきが如く、因果の鎖も亦無始無終なり證明。(一)若無始ならずとせんか、吾等は第一状態てふ者を許さざるべからず。さてこの状態が發展し結果を生じ行かんが爲には、是非ともそれに於て變化が生ぜざるべからず。然らばその變化は更に先てる原因の結果たらざるべからず云々——(二)如何なる將來に於ても變化あれば必らずそれを生ずるに足る丈の原因

あるが故に其限に於て因果の支配は無終なり。

〔一九〕 變化には三種あり、無機界に於ける者其の一、植物的生活に於る者其の二、動物及人間の生活に於ける者其の三。第二と第三とは合して有機的變化と稱するを得可し。是等の差別に應じて三種の原因あり。狭義の原因、刺戟、及動機、即是なり。

(一) 狭義の、即無機界に於ける原因の特性は、原因の度が進むるにつれて結果の度の進むことなり。原因はそれが結果に與へし變化に等しき大いさの變化を自ら受るなり。作用と反作用とは相等し (Action and reaction are equal)

(二) 植物的生活に於ける變化、植物界に於ける變化、及動物生活、人間生活に於ける植物的部分の變化は、刺戟によりて起る。この形の原因は作用を生ずる爲めには長き間續きて且つ觸接して働くこと、時として入込みて働くこと (例へば營業) を要す。原因の増進の度は必しも結果の増進の度と等しからず、否過度の刺戟は數々結果を全く反對の方向に向くることあり。 過食の例を想見るべし。

動物及人間に於ける植物的生活とは、成長、(呼吸、營養)排泄などの官能をいふ。

(三) 動物の官能の支配の下に在る動物及人間の生活に於ける變化、即隨意運動は、動機によりて惹起さる。この形の原因は觸接することも、亦長く續くことも要せず。動物の智力は直觀的表象の限界を出る能はざるが故に、其の動作は全く直觀的(即現在目の前に在る)動機に由てのみ起れど、人間にありては、抽象的表象も動機たるを得るが故に、其の動作は如何にも不可思議に探知し難き所あること數々あり。換言すれば人間は種々の動機を計較し商量する能力を有するが故に、果して如何なる動機によりて動作せしか知り難きこと度々あり。然れどもそれは決してその動作が原因無く必然ならぬといふには非ず。一切の有限物は因果律の羈絆を脱する能はざるなり。(意志の經驗的非自由性)

第五章 自然力

〔二〇〕 空間及時間の法則(是實に數學の研究の對象なり)も因果の法則も共に後に至りて證明するが如く、先天的、自然律たり。是に對して、知覺(經驗)より歸納によりて得たる後天的、自然律あり。是實に自然力のいつに易らぬ働きぶりを規則として言顯はしたる者に過ぎず。

〔二一〕 自然の經驗的見方によりて吾人の知合ひとなる者は實に空間及時間中に在りて因果の紐もて繋がれたる現象即ち物質の状態及變化なり。自然の一切の現象は數多の群に分たる。その各群は、共通の特性を有し從て渾一的なる内面的の或物の雜多の發表と見らる可き悉くの現象を集めたる者なり。

この内面的の或物は、吾等自身の内面の觀察より借來りたる力てふ語を以て自然力と稱せらる。(例へば重さ、不可入性、越歴、結晶力、及び動植物界の各種の如し)自然のあらゆる状態は皆互に争闘する自然力の張り合ひ也、睨合ひ也。あらゆる變化は因果の法則によりて強勢を占むるに至りし或力が一時他の力に打勝つとなり。(ヘーラクライトスの諺に曰争ひは萬物の父なりと)。

〔二二〕 自然力のあらゆる發表は總括して自然といふ然れども自然力自身は自然界に屬せざる者なり。經驗的に考察すれば自然力は全く存在せず。而して自然科学者は自然力の發表を究明する外は爲能はざるに拘はらず、猶且自然力其者を全く抛擲し得るに至らざるは、取も直さず自然科学にてはなほ盡さざる所あるを示し、從て形而上學の必要を指示する者といふべし。

〔二三〕 其故に如何なる出來事も原因にせよ、結果にせよ皆力の發表なり。因果律は單に如何なる力の發表も他の發表が原因として其れに先だつて非ずば出現することなきを云ふのみ。

されば力其者を以て或一定の結果の原因と呼ぶは、不精確にして非難すべき言ひ方なり。(例へば墮落の原因を以て重さとなすが如し。精確には、重さをしてこの時この處この物体に於て發表するに至らしめし事情を以て原因とすべきなり。墮落は重さの發表なり、後者を以て前者の原因となすは獨重き物は重し、又は落つる物は落つといふに等し)。

〔二四〕 經驗的科學は次の三重の職分を有す。

(一) 現象の觀察及記述

(二) 其時々の原因の究明

(三) 現象に發表する力を定むること

自然研究者に限らず、歴史家も亦是等三個の職分を有し、(一) 事實を探究し記述し、(二) 各の行爲の動機を研覈し、(三) 動機によりて所爲に現はるゝ所の人間を性格を描

寫す。

第六章 唯物論は經驗的世界觀の歸結たり

〔二五〕 經驗的世界觀に對しては、種々雜多の狀態に於る物質の外は何物も存在せざるが故に(「*On the Mind*」を)一切の存在する者は物質の變態に過ぎざるべし。人間の智力とても決して除外例たらざる事は動物のと何等の類似もなきものと考ふる能はざるにても一層明なり。さて動物の智力は神經物素の堆積によりて極めて感覺の度の高まりたる悟性(*understanding*)と稱する、器官にして、其の分枝たる感官に與へらるゝ刺戟に對して反動し、その反動によりて、尙ほ次に詳説するが如く外界の直觀は生ずるなり。人間の智力は動物的智力の度が進みて思慮、換言すれば、直觀をその要素に分析し、その等の要素を變りたる秩序に固定するを得るに至りし者にして、この作用よりして同じく後に至りて示すが如く、理性(*reason*)てふ道具とその内容たる概念及判斷とは生ずるなり。

〔二六〕 智力的作用の物質的なるは既に先天的に確かなれば(「*On the Mind*」)解剖學と生理學とは今更其を證明するの要なく、兩者の職分は固々の場合に徴して其の然

るを示すに止れり。さて思想器官の不充分よりして此事だに、今迄に一部分成功せしのみ過ぎざれど、兩科學は、思惟が、全く、腦髓に、依屬せるとを疑ふ可らざらむる一類の事實をその領内に有せり。幼年及老年に於ける現象、腦髓の尋常ならぬ又は片輪の發達に於ける現象、外部よりの損傷又は内部よりの病的影響によりて生ずる腦の變動に於ける現象、其他種々の現象は、其等の事實を供給する者なり。〔二七〕 デカルト (*Descartes 1596—1650*) が唱道し、其繼出者が姿をかへ、改良を施し、駁撃を試み、而してカントが擊破したる、然れども今日も猶通俗の考として勢力ある精神論、又は靈魂論 (*spiritualism*) —— 二種の實態あり、一は延長的他は思惟的にして、兩者は人間に於ては身軀及精神(靈魂)として互に結合し、死と共に分離すと主張する學說 —— は經驗理解及證明より等しく遠かれる、眞正の哲學的見解の妨害をなす、根本的謬見たり。

カントの駁論の正味は、存在は單に客體の普遍形式に過ぎず、されば吾人の一切の表象の主體たるのみにて客體たることなき物には應用すべからずといふに在り。

第七章 經驗的世界觀の慰藉なきこと

〔二八〕 唯物論又は唯物質論 (materialism) は哲學や宗教の高尙深遠なる眞理を蔑視し、その所説及歸結は美術の領分に於てはいかにも淺薄に凡庸に、倫理の領分に於てはいかにも安心なく慰藉なきは勿論なるが、それにも拘らず經驗的立脚地に於ては、最も正確なる最も整合的なる(矛盾なき)唯一の世界觀にして實に經驗的科學がそれに向て勵進し、又時と共にますます到達しつゝあるアイディアルなり。されば唯物論を擊破せんと欲するは實に徒勞に屬す。然れども一層高き世界觀——それと矛盾することなしにそれを壓服するに足る世界觀——を以てそれを完補する事は出來ぬか、といふ疑問は提出せらるゝなり。

〔二九〕 神自由、及不滅の居處なき世界唯物論の世界は吾等の心情にいかにも心苦しく堪へ難き重荷を負する者なり——さればこの慰めなき全世界を根柢より動搖せしむるを得し人々は實に萬世の感謝を値すといふべし。而して其等の人々は實に吾人自身の認識能力に足場を聞き、其大事業に成功するを得たるなり。(アルキメデスが余に足場を與へよ、余は世界を動かして見むといへる古事を參照すべし)

物理的科學はいかに事實を基礎として研究に従事するも、その本性上あらゆる

事實中第一にして最確かなる一個の事實を度外視せり。今や吾人は其事實に就て論究せんと欲す。

第二編 卓絶的立脚地 形而上學躰系

第一部 認識論

第一章 豫論

〔三〇〕 認識論は元來心理學の一部分にして、吾等の一切の表象の起源、本質及連絡を取扱ふ學問なり。吾等の表象は、本源的なるか、派生的(本原的の者より導き出されたる)なるかによりて二類に區別せらる。第一類は直觀的といひ、第二類は抽象的といふ。

〔三一〕 直觀的表象の能力は即悟性(understanding)なり。それに関する學問は之を悟性學(noetic)といふ。是の學問は悟性がその本有的官能を以て、その派出所と見らるべき五官に來る外來的刺激よりして、如何に(一)直觀的表象を産出し(二)其等相互間の連絡を探究するかを、闡明する者なり。

〔三二〕 抽象的表象の能力は即理性(reason)なり。論理學は理性に関する學問にして、この能力が直觀より渡されたる材料を觀念に仕上げ、これを又た判断と推

論とに結合する様を教ふる者なり。觀念を以て働くことは思惟すといふ。吾等は相互に思想を通ずる爲めに空氣を振動せしむ。是即口語なり。吾等は動物の如く單に音を聞くに止らて又た理解す。是れこれ等の作用に於て發表する能力の理性の稱ある所以なり。

〔三三〕 悟性は人間のみならず動物にも通ずる能力なり。如何なる動物と雖も悟性なきはなし。尤も下等動物の神経中樞たる腦を有せざる者にありては極めて薄弱幼稚なり。次第に神経組織複雑となり腦が發達するにつれて悟性の能力亦増進し以て人間に及ぶ。是の最高級に於ては悟性は非常に鋭敏となり、動物に於けるが如く單に外界の直觀を造り出すに止らで、外界に於ける空間的、時間的及因果的聯絡を隅の隅まで尋ね行くを得る者なり。

人間にはありて動物にはなきは理性の能力なり。その官能いかにも單純なれど、人類の禽獸と異りて麗しく偉大なる生活を送りうるは全くこの能力のみによるなり。

〔三四〕 内面より心理的に考察すれば悟性として現はるゝ其器官を外面より

生理的に考察すれば、脳(下等動物に於ては神経節又は神経環は脳の役目をなす)として現はる。理性は生理上特別の器官にあらずして、(後述する理由により)吾等が悟性又は脳と呼ぶ反応能力(外界の刺激に反應する能力の意)の一種特別なる、人類にのみ固有なる適用の仕方過ぎず。

(三五) 後段に於て詳論する如く、理性の内容は悉く直観より來る者にして、其の活動は直観的認識より渡されたる材料に、見渡すに容易なる、從て取扱ふに便利なる新なる形を與ふるに止りて新なる事柄は決して教ふることなし。されば物理學や形而上學に於ける眞の進歩は常に抽象的表象を去り其の土臺をなせる直観的世界に還り行くに非んば到底不可能の事なり。吾等は先づ本原的能力なる悟性よりはじめて次に派生的なる理性に及ばむ。

第二章 直観的認識の問題

(三六) 吾等は如何にして外界の對象を五官によりて知覺するを得るか。

手近なる物理的の説明の仕方は、それは光線なり音波なり先づ神経を刺激し其刺激が腦に傳はりて知覺を生ずといふにあり。若吾等の知覺が單に光とか音とか

いふ感覺のみならば、其れ丈の説明にても事足れど、さる場合極めて罕にして通常の場合に於て意識に入り來る者は主観的印象には非して外界の對象又は出來事なり。吾等は直接に外物を知覺するなり。例へば吾等の知覺するは網膜上にあり而も倒立せる對象の映像に非して、吾等は直接に事物、其自身、而も吾人の外に在る事物を見るなり。意識せらるゝは光線や主観的の映像にあらずして、遙かおなたにある外物が、全く直接に意識に入り來るなり。是一大自家撞着なり、然も有の儘の事實なり。——物理的説明は到底是の如き難關を切り抜くる能はざるなり。

第三章 世界はわが表象なり

(三七) 是難關を切抜けんには、吾等の認識中決して疑念を納れざるやうに、確かなる者は何ぞと尋ぬるに如くはなく、是を尋ぬるには、デカルトのなしたる如く、先づ一切を疑ふに如くはなし。さて吾等は教へられたる事傳へられたる事を悉く疑ふに止らで當面の世界前に在り横に在り後に在り視るを得へく捉ふるを得べきこの世界は實際存在せりや、將た寧ろ夢中の幻想五官の妄像に非ずやといふ

疑問をさへ發するに至りたりとせよ、——しかも茲に疑ふべからざる一真理あり。そは何ぞ。世界はわが表象なり、といふことなり。空間時間中に續れる是の世界、吾は是の物質世界が其自身に於ては何物なるかを問はざるなり、しかも此の世界はかゝる世界としては實に智力によりてのみ吾に知らるゝなり。智力は其本性上われに表象を與ふるのみ。されば全世界は吾自らの身體も其數に洩るゝことなし、吾がそれを智力によりて即ち外側より空間時間に於ける物體として、把握する限りは、吾が表象に過ぎざる也。是實に吾等が拒否する能はず、眞面目には疑ふ能はざる、最も確實なる真理なり。

〔三八〕 是の眞理が平乎として動すべからざる如く、吾等のそれに對して抱く反抗の念は決して禁ずべからざる者なり。殊に吾等がわが身に受くる堪へ難き苦痛も智力より考れば、他人が苦痛を受けつゝあるを目撃すると異なることなく、全く表象の外何物にも非るを思ふに至ては其反抗の念は一しほなるべし。——吾等にして若身體を有せず物質を離れたる純粹の精神、世界の仲間入りせずして單に其を映寫する鏡の如き者ならむには、世界は悉く表象なりといふ眞理は吾

等に何等不快不満の念を興へざるべし。何となれば世界は吾等に何等の利害をも及ぼさざる何等の意味もなき走馬燈に過ぎざるべければ也。吾等は自分の身に關せざる事は、たとひいかゝあらんも、氣を揉むに及ばざる也。——然れども實際は決して然らざるなり。吾等は世界を見物せるに止らて其の仲間入せる者なり。吾等は實に世界に對して二様の間柄に於て立てる也。一の間柄は間接的なり、則ち吾等は智力によりてそれを認識するなり。他の間柄は直接的なり、則ち吾等は身體によりて其に屬するなり、其中の者たるなり。この第二の意味に於て吾等及び世界が何たるかは、後章に至りて論ぜむ。吾等の今論じつゝあるは實に空間及時間に於ける物體としての世界なり。而してこの形に於ては世界は吾等の智力によりてのみ知られ、從て吾等の表象に過ぎざる也。

第四章 事物は其自身に於てもわが表象する 通りの儘なるか。

〔三九〕 世界はわが表象なり。而して表象としての世界は、事物がわれに現はるゝ其現はれ方なり。さて次に起る問題は、然らば事物は、われがそれを表象する通

り其儘なるか、即ち空間時間中に於ける物躰なるか、——はた是の形に於ける世界は單に智力に對してのみ存するに過ぎず、智力は其の構造上事物の眞實の相を啓示する能はざるか——にあり。唯物論はわれに現はるゝ儘を以て事物の眞相となす者なり。反對説を教ふる聲は古來あちこちに起りなかく、強勢を占む。印度の哲人は此流轉生滅の世界を生ずる根柢を無明(Avidya)にありとなし、全世界を以て迷妄と喝破せり。希臘の哲學者、バルメニデース、プラートンなどは五官の吾等を欺くを歎せり。基督教は人間の道德上の腐敗よりして智力の曇りを導かんとせり。(以弗所書四章十八に「心昏き者」とある是なり。殊に哥林多前書の二章を讀むべし。)其説き方こそ異なれ、皆吾等に現はるゝ儘は決して事物の實相に非ずとの意識を發表する者なり。

是の問題を解決する唯一の手段は吾等の認識能力の分析にあり。

第五章 表象の先天的及後天的要素。

〔四〇〕 あらゆる表象は互に完補する兩要素を含有す。表象する主觀と表象せらるゝ客觀とは即是なり。主觀、客觀、及表象は三つの別物には非して合して一

物をなす。主觀なき表象はなく客觀(對象)なき表象もなし。われに對しては表象の外何物もなきが故に、客觀なき主觀はなく、主觀なき客觀もなし。

主觀 Subject 及び客觀 Object は主たる者、客たる者の意なり。近頃は主體、客體の譯語を用

ふる人もあり。客は主に對してある者故、客觀の代りに對象とふ語も用ひらる。

〔四一〕 わが主觀の對象は直接的たるか間接的たるかの孰れかなり。直接的對象たり得るは、たゞわが「我」の變化即ちわが内部に於ける感覺あるのみ。而して是を生理的に考察する時は、わが感官に擴がれる感覺神經に於ける各感官特有の刺戟たり。一切の他の對象は——外界全體及び外部より考察する限に於てはわが身躰も亦——間接的對象としてのみ知らる。何となれば、神經の刺戟を経由するに非ずばわれは彼等に達する能はざればなり。

〔四二〕 さればわれがよりて以て外界の知識に達すべき材料、與件(Data)としては、直接對象として與へらるゝわが神經の變動の外は何も無きなり。是等の變動こそわが智力に、外より、即其自身より獨立に來る唯一のものなれ。さて是等の貧しき材料とわが眼前に横はれる豊かなる自然界とを比較して、其差異はいづこより

來りしぞと尋ぬるに、それは實にわが智力其者より來れるなり。其豊かなる内容より貧しき與件を引去りたる残りわが智力の產物なり。後天的に與へらるる材料即神經の變動は何の見榮えもなき離れくゝの糸の如し。其等を或は結び或は連ね客觀世界てふ麗はしき織物に仕上るは主觀の作用なり。

第六章 表象の先天的要素發見の葉

〔四三〕 形而上學の課業は先に〔四〕を云へる如く物其自、換言すれば事物の智力より獨立なる姿は何ぞと究むるにあり。されば事物よりして、智力の添加したる丈の者換言すれば智力が本來所有し居り、他より材料來るにつれてそれを經驗に織り上るに用ひたる先天的形式を引去らざる可らず。次に示す六個の特徴は悟性の先天的官能としてわが内にある直觀の要素を、後天的に知覺によりて他より入り來る要素より識別するの用をなす可し。

(一) 神經的變動として與へらるる知覺を變じて直觀(客觀世界)となすに必要な者、從て一切の經驗に、其の制約成立の條件として先だつ者は、經驗より來る能はず、即ち先天的ならざるべからず。

(二) 外より來る者はわが智力に對して偶然的の關係を有するのみ、其者が無くしてはならぬといふわけも又然あらではならぬといふわけもなし。換言すれば吾は其を無き者と考ふるを得るなり。さてわが直觀中には無しと考ふる能はざる若干の要素あり。されば其等はわれより獨立に存する者より來りしにあらでわが智力に離るべからず附着せる者なること明けし。

(三) 同じ理由によりて外來の一切の與件は何が在るか、を語れど、或者が必らず然らねばならず、異りては、あるを得ずといふことは告るを得ざるなり。知覺は必然てふ語を發言すべき舌を有せざるなり。されば事物に關する規定中、われが必然てふ意識を結附くる者は知覺より來る能はず。

(四) されば至明的(どう)しても、然らねばならぬといふ確實性を有する學說は知覺より來る能はず。從て直觀的世界中其學說の關係せる部分丈は元來わが智力に屬せる者ならざるべからず。

(五) 知覺はわれに感覺(色)とか響とかの如しを與ふるを得るのみ。然るに感覺其者は切れく離れくゝの者なり、何となれば感覺間に或連絡ありとせば、それは感

覺の聯帶にして感覺其者に非ればなり。されば感覺を統一し雜多の者に連絡を與ふる者は先天的にわが内に在らざるべからず。從て自然の連絡統一の制約をなす者はわが智力の本有的形式ならざるべからず。

(六) 知覺は無限なる者を包括する能はず。されば客觀世界の直觀中、われに無限と意識せらるる者ありたらんには、それは知覺によりて受領せられたる者に非ること明なり。是くの如くにして其者はわが認識能力の本有的形式をなすが故に直觀世界のいつこまで進むも其者を通り越すといふことなし。(其は其筈、われいづこに行くも其を持ちて廻ればなり)是實に其無限なる所以なり。

第七章 先天的要素—空間、時間及因果。

[四四] わが智力に先天的形式として附着し從て物其自を撰り分くる際取除けざるべからざる要素は三個あり、而して唯三個あるのみ。その三個とは、
一、空間^① 二、時間^② 三、因果^③
是等三者こそ吾人を取捲ける現象世界と眞の實在界とを區別する者なれ、とは形而上學の基本真理なり。是實に古今の形而上學を通じて少くも間接的には言

表はされざる真理なり。印度のヴェダンタ哲學に於てはブラーフマンは實に物其自なり。而してそは何者ぞ。曰く空間や時間によりて裂かるることなく、又變化といふことを知らずと。さて變化なければ原因結果亦無きなり。

物其自が因果の關係を超越せりてふとはプラトーン(497—847B.C.)の哲學の根本教義なりき。彼れは口を極めて因果によりて支配せらるる現象界、生ずといひ、滅すといふことはあれど在りといふことはなき世界、と眞の實在界との相異を唱へ強き言葉を用ひて後者より一切の變化を否定せり。因果と同様に、空間をも時間をも彼れは眞實在より遠けたり。聖書の形而上學は眞實在(神)を人格的の者となしたれど通常人格てふ概念に伴隨する制限を退けしは神の屬性として(一)永恒性即無時間性(詩篇九〇章二)(二)遍在性即無空間性(耶利米一三章二四)(三)不變化性即無因果性(詩篇一〇二節二七)を立つるにても明なり。

第八章 空間は先天的直觀形式なり。

[四五] 空間は直觀世界の一成分にして、其れによりて一切の對象は位置に從て相互間に規定せらるるなり。空間はわれより獨立に存在する者に非して先天

的なる直觀的表象なり。

〔四六〕 第一證

われは空間の直觀を有す。其は經驗より來れるか或は我自身より來れるかの孰れかなり。さて其は經驗よりは來る能はず。其故如何。經驗は我が或る感覺を我の外の或者に而して其等の感覺の相異を相並べる異りたる場處に關係せしむるによりて始めて生ずる者。此事たるやいづれの經驗に於ても既に空間の表象を豫想するなり。換言すれば空間の表象は一切の經驗に先だつ也。從て經驗よりは來る能はず唯わが認識能力に於てのみ其源を有するを得るなり。

人往々空間は内外上下左右等の關係の經驗より抽象し得たる概念なりとなす、是全く事の順序を轉倒せる者なり。内外上下左右は空間的規定なり。かゝる規定の經驗は既に空間の表象(觀念)を豫想せるに非ずや。空間的規定は空間に加へたる規定なり。空間は先にして其規定は後なり。其故に空間は先天的表象なり。

〔四七〕 第二證

われはわが外界の表象より一切を考へ去る(無しと考ふる)を得、只空間のみは然する能はざるなり。われは空間中には何物もなしと考ふるを得、空間なしとは

考ふる能はず。是に由りて空間はわれによりて表象せらるゝ對象にはあらで、わが表象の仕方としてわが表象能力に屬せる者なること明なり。我が表象する限りに其表象其者に附屬せる形式は決して取去るを得ざるなり。

〔四八〕 第三證

空間の個々の規定は皆必然的なり、其等の規定に背く者は皆不可能也。例へば或一物に達せんにはわれは必然的にわれと其物とを隔離する空間の凡ての部分を通らざるを得ず。又如何なる場處にも在らざること及び同時に二ヶ處に在ることは共に不可能なるが如し。かゝる規定の確實性は數々繰返されたる經驗より來る者とは類を異にするは誰しも感ずる所也。經驗はわれに今までは然ありき異りてはあらざりきと語るのみ、必らず然らざるべからざるを告げざるなり。其故に空間の規定にして全く必然的なるからは空間は經驗より來らず我自らより出たる者ならざるべからざる也。

〔四九〕 第四證

幾何學は其の命題(定理系説)を至明的に換言すれば必然なりとの意識を以て發

言す。されば經驗的科學には多くある爭論や假説は幾何學に於ては全く其跡を絶てり。是事の歸結として、幾何學の命題は知覺より導かれし者に非ず、是學問の對象は經驗的ならぬこと明なり。——さて幾何學の對象は空間なり。點、線、面、體等實際存在せざるものと想像するは其によりて空間の法則を開明せんか爲め也。譬へば戯曲の作者が人物の性格を明にせむが爲め種々の動作を想像によりて作出すが如し。——其故に空間は先天的表象なり。

〔五〇〕 第五證

外的知覺は無數に異れる雜多の部分をも有す。其等はわが知覺としてわれに關係を有するのみ相互間には何等の關係をも有せざるなり。從て其等を連絡ある直觀に統一し結合する聯帶はわが外にはあらでわが内に無かるべからず。さて外的知覺の無限の數多態を外的直觀の渾一態に聯結する紐帶は空間なり。其故に空間はわが外にはあらでわが内に在るなり。

〔五一〕 第六證

空間は(証明せらる如く)無限なり。あらゆる太陽系のかなた、如何なる望遠鏡も達せざる遙かなたにもなほ空間在るはわが確かに知る所なり。而もわれは經驗よりそを知る能はず、其故に吾はそを先天的に知るなり。

第九章 時間は先天的直觀形式なり

〔五二〕 時間は直觀世界の一成分にして其れによりて一切の狀態及變化は、內的經驗に屬する者にせよ、外的經驗に屬する者にせよ、順次に從ひて相互間に規定せらるゝなり。時間はわれより獨立に存在する者に非して先天的なる直觀的表象なり。

〔五三〕 第一證

時間の表象は經驗より來る能はず、何となればあらゆる經驗は成遂せられん爲めには既に時間の表象を豫想すれば也。經驗を有せんが爲めにはわれは或る感覺を同時に、か或はつぎ、くに、か有せざる可らず。しかるに同時又はつぎ、くは感覺其者の中には存せざるなり。其故に時間は全くわが内に在るなり。

〔五四〕 第二證

今世界は靜止しあらゆる運動は妨碍せられあらゆる變化は停滯せりと假定せ

よ。然らば一切の時計は止り世界的大時計(太陽の周囲を廻轉する地球)も進まぬ爲めに時間を計るべき便べは全く盡果つべし。而も時間其者は頓看なしに進行すべく其事件のなかりし前と同様一瞬時より他の一瞬時と平然移行くべし。さて其事件の爲一切の内的及外的知覺は(是等亦一種の變化に過ぎざれば)消え失するもなほ時間(全く内容なき)の表象は依然として殘留し、わが表象能力の消え失するに非んば決して消え失することなし。其故に時間の表象はわれより獨立に存立する事物に屬する者ならでわが智力に其の離る可らざる形式として附着せる者なること明なり。

〔五五〕

第三證

時間の個々の規定は悉く必然的、其れに背く者は悉く不可能なり。未來の或る時に達せんが爲めには我は是非とも(必然的に)現在と其時とを隔つる丈の長さの(其より長くもなく短くもなく)丁度其丈の長さの(時間を経過せざるべからず。又昔を今になす由もなきは誰人と雖も承認する所なり。さて是の如き確實性は經驗によりて達せらるべきにあらざるは其の必然性を有するによりて明なり。)

——古人の生年月に就て歴史家中説を異にするあるは珍しからねど、今異説は皆正しといふ人あらば吾等は何と答ふべき。今まで人が異りたる年月に同時に生れたることを聞かずと答ふべきや。吾等は寧ろ是の如き事を眞面目に主張する人は氣の狂ひたる者と見做して取合はざるべし。何となれば是れ經驗の材料を時間てふ形式に従て排列する仕掛の狂ひしを示せばなり。

〔五六〕

第四證

幾何學の命題と同様に算術(又は算數學)代數學の命題も至明的確實性を有す。從て是の學問の對象は經驗より來る能はず。さて幾何學が空間に就ての學問なりし如く算數學は時間に就ての學問なり。是れは次の事によつて明なり。様々の込入りたる式や運算を悉く引きくるめて算數學は方法的に簡畧にせられたる勘定と見るを得可し。方法的とは一定の方法(其名に算の字あるにても明なり)。勘定する時は吾等は時間を除きては他の一切の者より抽象するなり。抽出とは抽出の意其故如何にといふに。計算又は勘定といふことは單位を繰返すことにし、其繰返ごととに別名(一、二、三、四、を……)與ふるは幾度繰返したりといふことを

知らんが爲めのみ。然るに繰返すといふことはつまりは一が他の次にあり又一が他に繼ぐといふ事によりて出来るなり。さて是の繼次は取も直さず時間の本質なり。其故に計算從て算數學は時間の學問なり。算數學の命題の至明性よりして時間の先天性は結論せらるゝなり。

〔五七〕

第五證

如何なる知覺にても内よりか或は外よりか若干時の間變動を受くるによりて始めて生ずるなり。其時間といふはいかに短くも必らず無數の部分より成立つ。從て其時間を充すわが主觀の變動も無數ならざるべからず。是等無數の變動はわが變動としてわれに關係するのみ相互間には何等の連絡をも有せず。然るに實際は其等無數の變動は連合して一の知覺を成し居るなり。さて其連絡結合を生ずる系が變動其者に存せざるからにはそはわが内へのみあるべきは明なり。其系は即時間なり。故に時間は知覺綜合の制約として先天的ならざるべからず。

〔五八〕

第六證

時間は兩方向に向て無限なり見八。吾は歴史の遡及する能はざる太古にも又如

何なる預言者の鋭眼も見抜く能はざる將來にも時間あるを確かに知る。しかもかゝる事は勿論經驗によりては知るべからず。從てわれはるを経験より獨立に換言すれば先天的に知れるなり。

第十章 因果は先天的直觀形式なり

〔五九〕 空間が事物の位置の秩序、時間が其の繼次秩序なるが如く因果は事物の作用の秩序なり。さて個々の場處や個々の時は皆經驗的に定まれど是の如き經驗の一般の可能性として空間及時間其者は先天的直觀形式たりし如く個々の働きは經驗によりて定まるものゝ働き作用の一般の可能性即因果は次に證明する如く先天的なり。因果は因果律の命ずる仕方にて一切の作用即一切の力の發現を互に結び附け其を先だち行ける力の發現の結果とし繼で來る發現の原因として繋ぎ合する鎖と見るべし。

〔六〇〕

第一證

直觀世界に存する作用のそを惹起す他の作用に對する關係、即因果の關係は經驗によりて學び得たる者に非して吾等をしてあらゆる力の發現を結果と考へ直

接は何等の反省もなくせんと思ひてするやうに其より其原因へと無理やりにも廻らしむる先天的本有的能力なり。是事は如何なる經驗にてもなされんが爲めには、必らず因果の適用を豫想するにて極めて明なり。既に〔四二〕に於て説き示し、如くわが外より來る者は感官神經の變動のみ。其丈にては決して外界の直觀をなさぬなり。〔光にせよ音にせよ其丈にて〕外界の直觀はわが内にある先天的の一能力が其等の變動を結果と考へわが外にある〔即ちわが先天的の空間の形式に従ひてわが外に置きたる〕物体を原因として其に關係せしむるによりて生ずるなり。かく因果によりて外界の直觀は始めて生ずる者なれば其直觀より得來りたる者にあるを得ず換言すれば先天的にわが智力中に存せざるべからざるは明なり。

〔六一〕 第二證

因果は其自身に於ては直觀せられず原因結果の關係を目に空間及時間と結附きて物質となるに及ではじめて直觀せらるゝやうなるなり。〔物質は因果を客觀的に見たる者なるは後に至りて説明すべく今は假りに兩者を同一と見置きて可なり。〕然るに今其物質を検査するに奇妙の性質を有するなり。物質は偶然的にし

てしかも必然的なり。われはげに何等の物質も無しと考ふるを得れど〔是空間と時間とに於てはなき事ながら一旦有り〕と考へたる以上は決して無しと考ふるを得ざるなり。物質の不生不滅はこゝより來るものにして實に一切の經驗に先ちて先天的に確かなる眞理なり。物質の生起も消滅も共に考ふることだに出來ぬといふことは取りも直さずわが智力と物質の存在とを離す能はざるを示す者にして、從て物質は其によりて擔はるゝ力の如く、わが智力より獨立の存在を有する者にあらず、わが智力に其の本有的形式として附着せる者なること明なり。

〔六二〕 第二證

因果の一切の規定〔三〇〕までの必然的なり。其等の規定に背く者は悉く不可能的なり。或作用をいかなる原因よりして説明すべきかといふとにつきては屢迷ふとありとも、必らず或原因を有せざるべからずといふことは儼然として動かすべからざるなり。犯罪人あり己れが犯罪に關係なきを示さん爲其犯罪の起りし時頃には我は如何なる場處にも居らざりきといはゞそを信ずる裁判官のなき如く、事實として確立せる犯罪が何等の原因も無くて起りしを主張するも裁判官

はそを取り合はざるべし。若因果律にして後天的に得たる自然律ならんにはいかに洽ねき経験とても全く除外例なきを保するを得ざるべし。

経験は必然といふとを教へずとはデライツド、ヒューム(一七一—一七七六)もカントも等しく確信せし所なりき。されど両者が是の命題より導きたる歸結は全く異れり。今左に之を比較せむ。
ヒューム以爲らく。

経験は何等の必然性をも與へず

然るに因果律は経験より來る。 故に

何等の必然性をも有せず。

カントは以爲らく。

経験は何等の必然性をも與へず。

然るに因果律は必然性を有す。 故に

経験より來らず。

〔六三〕

第四證

幾何學及算數學の外に尙其の命題が至明的に確實なる學問あり。そは自然科學より經驗によりて得られたる自然律を取去りたる殘餘の部分にてカントの純粹自然科學と稱せし者なり。吾等が自然に就て有せる知識中より經驗的に歸納によりて得られたる者を悉く引去る時はもはや此とか彼とかきまりたる作用は殘らず。殘るは作用の一般の可能性(即因果)にして空間を充實し時間中に止住する者と考へらるゝ時は物質を成すなり。(是の事は後に至りて證明すべし)。物質の運動靜止の教は至明的確實性を有す。故に其の對象は先天的に知らるゝ者なり。

〔六四〕

第五證

知覺はわが受くる變動によりて生ずる者なるが其變動は決して相互間の關係を與ふる者に非ざるは空間時間を論ぜし時にいへる如し。かく因果が知覺より來らずとすれば其を生ずる者はわが悟性ならざるべからず。即ち悟性は物體を空間に變化を時間に排列せし如く一切の知覺せらるゝ力の發現を因果の關係に排列するなり。かくいふもの勿論何が何の原因結果といふこと即個々の場合は

經驗よりして導かるゝなり。

〔六五〕 第六證

因果の鎖は〔二八〕に於て始め無く終り無し。換言すれば時間には無限なり。空間に於ても無限なりやは吾等之を知らず。何となれば〔二九〕一切の作用從て一切の因果と離るべからざる物質の蓄へは果して無際限なりや否や吾等の知らざる所なれば也。されどいかに遙の星に於てもいかなる過去にありても又いかなる未來に至ても原因なき作用なき丈は確かなり。されどかゝる遠方までも經驗の達すべきにあらねば吾等のそを知れるは經驗より獨立に即ち先天的に知れるなり。

附言。是の證明よりしても物質客觀的に直觀せられたる因果は創造せらるゝを得ず又絶滅せらるゝを得ずてふ命題を導くを得可し。

第十一章 經驗的及卓絶的立脚地

〔六六〕 提要

今迄の研究の成果を要約すれば次の四條となる可し。

- (一) 世界は徹頭徹尾物質的にして因果の鎖に繋かれ無限の空間中に於て無限の時間存続す。〔二六〕より〔二九〕に至る
- (二) 然れども是の物質的世界は徹頭徹尾わが智力の表象(觀念)に過ぎず。其物質性は事物のわれに現はるゝ形のみ。〔三六〕
- (三) 其自身即ちわが智力より獨立には吾等が感覺又はわれの變動と呼びたる者の外は何も存在せず。〔四〇〕より〔四二〕迄。是れとても其の本質の何たるかは全く知る能はず。尤も生理學上より觀察する時は智力は腦髓として見ゆるが故に其變動は感覺神經の刺戟なりといふを得べきも是既に吾等に現はるゝ様をいうたる者にて其自身に於ては何物なるかを語るに非ざるなり。
- (四) 外界即自然界の骨組をなせる空間時間及因果の三者は既に周到證明せるが如くわが智力の本質を成す本有的形式なり。生理學的にいへば腦髓の機能に屬し從てわが認識能力より獨立に存立し得べき者に非ず。

〔六七〕 吾等の確立せる事實に對して三個の立脚地を取るを得。そを看過するは之を經驗的といひ蔑視するは之を超越的といひ利用するは之を卓絶的とい

〔六八〕 經驗的立脚地 (Empirical standpoint) は人間の生來有する者にして又殆んど凡ての人の一生去る能はざる者なり。是の立脚地は又數學を除くの外一切の科學に及び純道德的行爲を除くの外一切の實際生活に効力を有する者なり。(道德的即無我の行爲が是の立脚地を棄つるが爲め超世間的の性格を帯び他の世間的動作と矛盾を來すとは後に至りて論ずべし)。是の立脚地は認識論の考察によりて明になりし事實を全く顧みざる者にして唯吾等に對しての世界にのみ係はり世界の真相其自身に於ての事物に就ては全く頓着せざるなり。げに自然科學の對象をなし實際上の設計の基礎をなす自然の歎賞すべき秩序規律は物其自の客觀的眞の實在に秩序なりやはたわが智力の主觀的法則に依る者なりやは實際生活や其れの用達ともいふべき自然科學にはどちらにてもかまはぬ事なり。其故如何にといふに。空間時間及因果は智力の本有的形式に過ぎざれど其にも拘らず世界及其の凡ての出來事は其等の弛みなき繫縛の下にあり其等が物其自の永恒の本性をなすと少しも異なる所なし。更に是の如くなりし原因いかにと尋ぬ

るに。(一) 智力即ち認識能力は一切の生物に於て勢力從て程度こそ様々に異なるに。本質に於てはいづれも全く同一にして同一の變動に會へば其より同一の直觀を産出するに至ると消化器の食物中より吸收する物質の一切の人間に於て同一なるが如し。(二) 次に智力は一切の存在の缺くるとなき制約にして世界なくては智力なき如く智力なくては世界決して無きなり。かくいはば或は異論を挾む人あらむ。曰生活もし認識もする者の發生迄には地球は幾多の變化幾多の革命を経たるに非ずや智力なくとも世界は存在したるに非ずやと。われ答へていはむ。地質學の教ふる過去の世界は當面の現在と同じく空間及時間に縛られをる吾等の認識能力に現はるゝ事物の形に過ぎず。其自身に於ては何等の時間もし從て又過去や現在や未來は有之なきなり。

〔六九〕 超越的立脚地 (Transcendent standpoint) は其名の示す如く經驗によりて達せらるべき知識の限界を超越する者なり。吾等が數千年以來蓄積せられたる經驗により知れる事及又將來に於て其上に知るに至る事は茫々としてはてしなき大洋中の一孤島に比すべし。其狹隘なる經驗界以外現象界以外にわが本源有る

を意識せる人心は古より故郷なつかしげに吾等の認識能力の本性上如何にともすべからざる限界を超越せむと試みたり。されど是全く無駄骨折のみ。吾等はいかなる方面に向ひはてしなく進むも矢張り経験界現象界中を彷徨する籠の鳥なり。カントは其の「純粹理性批判」に於て是の眞理を説破せり。彼れは認識能力の限界を確定せむが爲めにそを分析しかくて未曾有の大発見をなせり。智力の先天的形式を発見せるは他人に非ず即ち彼なり。

〔七〇〕 卓絶的立脚地 (Transcendental standpoint) はカントに始まりし稱號なるが超越的立脚地とは異り経験の限界を超越せんとせずして経験によりて與へらるゝ世界を根本迄も悟らむとする者なり。是立脚地は先づ世界を限なく研究し其れより智力の形式を引去る。其等の形式を発見せるは既にいへる如くカントなり。是の発見を活用し先づわが内部より始めて世界の秘密を照すべき光明を発見し古來幾多の哲人が鬚髯の間に認めながらしかとは捕ふる能はざりし者を學問的に得たるはショーペンハウエルなり。

卓絶的立脚地は経験界其儘を以て満足せず然も経験界を超越して空想界に出

遊するにも非ず経験の限界まで行きそを超越せずして彼方を見渡すなり。経験界を去らずして其経験界の深遠なる意義を悟らんとするなり。世界を一大書籍とせばその書がいかなる深遠なる意義を宿どせるかを知らむとする者なり。紙上に印刷せられたる文字を抛棄して顧みざるは超越的立脚地なり。文字を読み其を土臺として深意を會得せんとするは卓絶的立脚地なり。文字を読み得るも意を悟る能はざるは經驗的立脚地なり。

第十二章 經驗的實在。

〔七一〕 卓絶的立脚地の第一の成果は直觀的認識の問題の解釋なり〔三六〕を見よ。是れ經驗的立脚地に於ては全く不可能の事にして従て他に高等なる立脚地あるを示すなり。

認識の器官は生理學上より見れば腦髓にして恰も五個の支局を有する電信本局と見るを得べし。されど如何様にして腦髓が五官より來る感覺を表象觀念に仕上るぞといふことは生理學にては教ふる能はず。是に於てか心理學が來援するなり。内面的觀察によれば腦髓は悟性として現はる。

〔七二〕 悟性は先づ第一に五官の受くる變動即感覺を自身が本來所有する時間といふ系もて結び合はせ連絡ある全軀となす。第二には外來的變動を同じく自身が本有する因果によりて結果と考へ、さて何等の反省もなく全く直接的本能的に其れが制約をなす原因へと進む。かくて第三には同様わが本性に附着せる空間によりて其原因をわが外に置く。かくして現れ出づるは物軀即物質的對象なり。

〔七三〕 以上述べたる仕方にて出来上る對象は其度頃に極めて狭き範圍内にあ
る者のみ。されどかくして生じ得る對象とはいはゞ經驗的實在の全軀なり。經驗的實在の世界即經驗界といふはわが表象に過ぎざるは勿論なれどそれは現在其度毎に表象せらるゝ者の外なほ表象せられ得る者を含めていふなり。存在すとは其故に感官もて表象せらるゝを得といふことなり。可能的なりとは其存在感官によりて表象せられ得る事が表象せられ得といふことなり。

〔七四〕 吾等が今迄の考察によりて得られたる者は觀念論又唯心論 (Idealism) なり。其教ふる所は何ぞ。曰。空間及時間に於て極みなく擴れる自然は吾等の

智力の形式の制約の下に於てのみ存立する者にして其等を離れて形而上學的意義に於ては何等の實在性をも有せず。何となればそれは元來絶えず而も其都度新に感官の變動と悟性の形式とより生ずる産物に過ぎざればなり。觀念論又は唯自然を以て唯だわが心の。——是の眞理はいかにも奇怪に聞ゆべけれど其奇怪は觀念のみとなせばなり。——物軀界は物其自(眞の實在)の本質がわが眼に映ずる姿なるを即ち眞の實在に根源を有せることを想はば薄らぐべく更に第二部に於て眞の實在は何ぞといふこと明になりし後其が如何にして自然界として現はるゝに至りしかを究むるに至らば全く消え失すべし。

〔七五〕 直觀的世界即わが眼の前の世界が感官及悟性の協同の産物なるは視覺によりて例證するを得可し。外物より眼に入り来る光線は瞳孔に於て交叉す。されば網膜上に映ずる像は常に倒像なり。イロ線はロイとして感覺せらる。されど悟性は其本有の因果によりて網膜に於ける變動を其れに該當する原因に關係せしむ。即ち光線の來りし道を逆行し網膜上のイ點を對象上のイ點に持行きかくてイロ線を見る。網膜上の變動を因果的に考ふるは倒像を更に倒逆するこ

と即ち直視することなり。——其他對象の兩眼に於ける像は決して符合する者に非るに拘らず一對象として見ゆると。網膜像は平面像なるに拘らず(即ち吾等は平面を感覺するに拘らず)吾等は立體を見ること。感覺は全く眼球中に在るに拘らず吾等は外物を而かも其の遠近までも見ること。其他幾多の光學上の事實は直觀が悟性の産物なるを證する者又吾等の學說によらずば決して説明するを得ざる者なり。

第十三章 悟性の二様の用法

〔七六〕 わが内部の變動(感覺)より外界の原因に及ぶ悟性の用法は即ち直接的用法なり。されど又吾等は外界の對象間の因果の關係を規定す。是れ悟性の間接的用法なり。間接的使用の卓絶せる者は實際生活に於ては「かしこし」といはれ學問界に於ては「するどし」と呼ばる。「をろか」とか「にぶし」とかいふは其の反對にて時としては博識と結合することあり。生字引などいはるゝは是の類ひ也。

第十四章 物質を卓絶的立脚地より考察すれば何ぞ。

〔七七〕 外界即物體世界は〔三七〕〔三八〕に論ぜらる如く悟性が感官の變動を因果によりて空間時間中に投射するに由て生ずるなり。變動は力の發表なり。されば物體は空間を充せりと表象せられたる力に外ならず。カントのいへる如く物質的對象は力もて充されたる空間なり。

今力を除去らば即物體中より吾に作用する者を悉く引き去らば残るは何ぞ。何もなき空間のみ。されどかく外界を力と空間とに分析し盡し其にて満足し得る人は抽象的認識の力の餘程勝れたる人なり。直觀的認識の方勝れをる人に在りては力を悉く取去りても空間の外に尙何者か残るが如き心地すべし。勿論吾等に作用して或感覺を生じ得べき力のなきこと故見ること感ずることも其他知覺することもかなはねど、漠然と何者かなほありとの感を禁ずる能はさるべし。其何者かは即ち人の物質又は實體など呼ぶ者なり。さて物體に於ては力のみが吾等の智力より獨立なる即ち實在的なる者なるが故に、彼のあるやうの氣がする物質は吾等の智力の形式に基づく現象に過ぎざるべし。其現象は次に述ぶるが如くにして生ずるなり。

〔七八〕 吾等の悟性は直観に際して絶えずわが受くる變動を空間時間に投射しつゝあり。變動は既にいへる如く力の發表即作用なり。さてわが意識よりして個々の作用を悉く除き去らば残るは作用の一般の形式即ち因果のみなるべし。悟性は絶えず個々の作用を外界へと投射し以て外界を直観しつゝあるが其が習慣となりて其等の作用を考去りたる後に作用の一般の可能性即ち因果其自身を空間を充實し時間中に常住するやうに直観す。是即ち物質又は實體なり。されば物質は決して實在するものに非ず唯だ物體的存在の可能性を物體と考へたる者、因果を空間時間中に直観したる者に過ぎず。つまり悟性が自己の官能を恰も實在せるかの如く直観したる者なり。即ち空間的に感覺を排列する官能を恰も主觀外にあるかの如く直観したる者が吾等がわが外にありと思へる空間なると同様に、悟性の凡ての官能、空間時間及因果に従て排列する官能を一團となしそれを客觀的に存在せるかの如く直観したる者が即物質也。されば物質は悟性の客觀的反射ともいふべき者なり。

第一部附録

理性を論ず。

第十五章 序説。

〔七九〕 理性は人間にのみ固有の能力にて直觀的表象よりして差別を棄て同一を取りつゝ抽象的表象即概念を抽出し是を抽象すといふ更らに概念を判斷に判斷を推論に結合する能力なり。直觀的認識に對して概念を取扱ふことを思惟と呼ぶ。

例へば實際に直観せらるゝは何の誰といふ個々の人間なり。其中には色の白きもあらむ黒きもあらむ。鼻の高きもあらむ低きもあらむ。容貌の美しきもあらむ醜きもあらむ。身長五尺以下のもあらむ六尺何寸といふもあらむ。その他是の如く一人づゝによりて異なる點は無數にあらむ。其等を皆除き去らば一切の人間に共通の點のみ残らむ。例へば理性を具へをりとか、

脚が二本ありとか、羽が生へて居らずとか、いふが如し。其等共通の點のみを考へたるものが即ち人間てふ概念なり。

〔八〇〕 概念は眼にて視、手にて觸れうる底の者にあらざれば、そを通じ合ふに他に道具を要すべし。そは即、ことばにて口腔の諸器官によりて種々に變形せらるゝ聲音なり。されば言語は思想が知覺せられ得るやうになりたる者といふべし。

第十六章 概念の起原及本質。

〔八一〕 注意を値ひする事實は自然が全く平等にはあらねど、又各部分に於て全く差別のみあるにもあらず、同と不同とをまじへて有することなり。こゝに赤き花ありと思へば、かしこに白きあり。同じ青が蒼穹にもあり、鳥の羽にもあり、又草花にもあり。似よりのある物の間には、又差異の點あり。差異の點ある物の間には、又共通の點あり。吾等は異時に於て異處に於て同じ物に出會ふは、常に經驗する所なり。其等の物どもは相互に何か秘密の關係を有せざるべからず。さらでは如何にしてかくまで似寄ることを得べきぞ。——是實にプラトーンが其の

形而上學に向ふ門出に際して發したる問なりしなり。是事は後に至りて論ずべし。今は唯だ概念の形成上よりして自然の是の注意を値ひする事實を指摘したるのみ。

〔八二〕 動物とても事物の同不同の見分けなす。時としては其見分け人間のより正確なることあり。獵犬が草叢茂れる中より鳥などあさり出すにても知らるべし。されど、腦髓の發達の不完全なる唯、其一時、丈わが意志の利害に關する事柄に着目するのみ。人間は其とは全く異れり。犬は直に石塊と肉片とを區別すべし。されど其は唯眼前にある者を區別するに止りて石といふ者と肉といふ者とはいか程異れりなどいふことには決して想到らざるなり。彼れは肉のかほりに誘はれて直に石をすてゝ肉を取る。人間はさまざまの肉の直觀を共通の部分と不同の部分とに分ち共通の部分丈を心中に留め、かくて肉の直觀よりして肉の概念に到達す。動物の見分けはいかに鋭きも眼先の事丈に關するのみ。

〔八三〕 されどよく／＼考ふる時は抽象作用も畢竟は意志の奴婢のみ。人間の利害には一々の事物よりも事物間の關係の方が大影響を及ぼすなり。眼前の

關係を見る丈よりも如何なる者は如何なる關係を有し得る者ぞといふことを必
得をる方都合よきなり。是に於てか智力は直觀を分折し若干の特徴といふ者と
なし(肉はうましといへばうましは特徴なり。うましといふ事は欲求に關係す。
動物は眼前にある關係の外は看取し得ず。然るに人間は肉はうましといふ關係
を有し得る者ぞといふ事を心得居るなり。されば特徴は可能的關係ともいふを
得べし。人間が動物に勝れをるは是可能的關係を心得居れば也)さて其特徴を整
頓し理性といふ倉庫に何時にても用ある時は出して使ひ得るやう蓄へ置くなり。
人間の智力が若し意志の手先に使はるゝ僕婢ならざりしならんには何等の概念
をも有せずじりしならむ。

〔八四〕 梅櫻松杉等の概念は各若干の特徴より成る。其等の特徴の一部分は
四者に於て全く異れど一部分は全く同じ。さて其不同の特徴を棄去り同じき
者丈を保存する時は外延に於ては豊かなれど内容(又内包ともいふ)に於ては貧し
き概念を得べし。是即樹の概念也。外延豊かなりとは樹といふ下に概括せらる
ゝ者は松などいふ下に概括せらるゝ者より範圍廣しといふことなり。何となれ

ば松てふ概念が個々の松樹をわが下に概括するが如く樹の概念は松も杉も梅も
櫻もとわが下に概括すれば也。同様の仕方にて吾等は樹の概念より更に植物の
概念へと進み、そこより有機體そこより物體而して終に「實體」又は「有」てふ概念に達
すべし。是の概念は莫大の外延を有す。何となれば凡てある者は其下に概括せ
らるれば也。されど其の内容はむげに貧し。何となれば唯ありてふ一特徴に限
られれば也。従て又其以上に普遍なる概念を有することなし。同様に吾等は
赤や圓や甘や寒などより發して最も外延に於て豊かに内容を於て貧しき概念に
達するを得べし。性質の概念は即是なり。

〔八五〕 是の如き最も普遍なる概念をアリストテレス(紀元前三八四—三二
二希臘の哲學者)は範疇(Categories)と名けたり。彼れは又十個の範疇を擧げたり。
一實體(Substance)二分量(Quantity)三性質(Quality)四關係(Relation)五處(Place)六時(Time)
七位置(Position)八狀態(Mode of being)九能動(Activity)十受動(Passivity)。されど是等
は次の三に約むるを得可し。一實體、二性質、三關係。處と時とはカントのいへる
如く概念には非して直觀なり。又分量も畢竟性質に外ならず。其他のも皆性質

か關係かに直ほすを得べし。

〔八六〕 最下の概念より最上の概念即範疇に至るまでの概念の全体系は直観に其の源を有するなり。其体系は次の注意すべき特性を有す。即、普遍はわが下に特殊を概括すれど特殊はわが内に普通を含有することなり。例へば樹は松も櫻も其下に概括し而して松も櫻も特徴として樹といふことを含有するが如し。されば概念は抽象的産物なれど矢張り現實界に屬するなり。個々の事物は特徴として最も普通なる概念即範疇をすら有するなり。

第十七章 概念の結合。

〔八七〕 凡ての判断(Judgment)は二個の概念を結合せるものにして、其の一(則ち述部 predicate)が他のもの(則ち主部 subject)に就て是定せらるゝと否定せらるゝとの二つの場合あり。

〔八八〕 判断に二種類あり。主部概念が述部概念をその特徴(Mark)として含有し、從て前者より後者を引出しだにすればよき時は、其判断を分析的(analytical)といふ(例へば薔薇は花なりといふが如し)。薔薇といへば花といふことは其中に

自然と含まり居る故、其含まりをる者をあらはに引出しだにすれば、薔薇は花なり、てふ判断を得る也。主部の概念中に述部が含まれ居らす兩者を結び附けむ爲めには直観に問はざるべからざる時は、其判断を綜合的(synthetical)といふ(例へば薔薇は赤しといふが如し)。されば分析的判断を下さむが爲めには、從來の經驗に由て蓄へ置きたる知識のみにて事足り、更に新經驗を要せず。是の意味に於て吾等は凡て分析的判断は先天的則ち經驗より獨立なりといふを得べし。綜合的判断は常に直観の世界に於てのみ與へらるゝ結合を示すものなれば、悉く後天的なりといひ得べきなれど、直観には既に論ぜし如く先天的要素を含む者なれば、其要素に關する判断のみは綜合的にして而も先天的なりといふべき也。かゝる先天、綜合的判断は〔四九〕〔五〇〕〔六一〕に於て證明せし如く、數學の與ふる所也。先天綜合的判断といふことは哲學上肝要なることなり。是實にカントの「純粹理性批判」の出發點をなせば也。

〔八九〕 述部は主部の下に包括せらるゝ凡ての概念に關して効驗あるは言を俟たず。(例へば、凡て存在するものが神に由て造られたるならば、惡も亦然り)といふが如し。何となれば、惡てふ概念は存在する者てふ概念の下に包括せらるれば

也。普遍的判断より特殊の判断を導き得るは全く是に由る者にして吾等は思惟する際には絶えず然爲しつゝある也。論理學に於て斷案と稱する者は則是也。

〔九〇〕 凡ての概念が直観より導かれたる者なるが如く凡ての正しき判断はといのつまりは直観の世界に於ける關係に土臺を有する也。直接に直観より導かれたる判断は勿論、或る普遍的判断より演繹して得たる判断とても元を糺せば直観より歸納して得たる者に非るなし。一命題を他の命題に還元し、其を経て更に直観に還元することを論理學に於て證明といふ。さて直観は凡ての判断及證明の直接又は間接の基礎なれば其自身は證明するを得ず、又た證明を要せざる也。されど直観世界に屬する關係にても、其が餘りに時間的空間的に隔たりを爲め又は餘りに微細にして直観のみにては確に把握するを得ざる爲め、吾等の觀察以外に存する時は、他の直観世界の關係よりして其を導き出すこと則ち證明を用ふることあり。幾何學に於ても關係微細となる時は證明を用ふる也。

〔九一〕 物理學や哲學に於て抽象的表象を用ふるは其に由て直観の世界を把握せん爲めの道具として用ふるに過ぎず。抽象的表象は其自身價值を有するに

非して直観世界に其の根柢を有する限に於て價值ある也。直観世界は凡ての學問の唯一の對象なり(但論理學を取除く)。

第十八章 理性は特殊の生理的器官を有するか。

〔九二〕 凡て存在するものは物質的なれば智力も亦然り三三三六五腦と智力とは同物の異名に過ぎず。かく異名の生じたるは、この場合に於ては器官と官能とが全く異りたる仕方もて認識せらるゝに由る也。生理學は唯器官のみを心理學は唯官能のみを知る。是等二つの見方は互に補ひ合ふものにして、決して矛盾するものに非ず。

〔九三〕 心理學は人間の智力の働きには二種あるを教ふ。直観及思惟即是也。さて茲に次の如き疑問起るべし。是等の二つは異りたる能力なるか、將又同一能力の異りたる發表の仕方なるか。悟性と理性とは生理的に見て二つの特殊の器官なるか、將又同一器官の異りたる二種の官能なるか。

〔九四〕 次の數個の理由は第二の場合の眞なると換言すれば、人間の認識能力の渾一なるを教ふる也。

(一) 人間の脳は一部分に於ては關係を異にし發達の度を異にするも、大體に於ては動物のと構造に於て一致せり。是の事實よりして動物も亦幾分か思惟する者なりなど結論する無學漢もあるべけれど、吾等は却て其に由て人間に特有なる思惟の作用は單に腦髓の特殊の官能に過ぎざるを見る也。

(二) 認識の役を務むる器官は大腦のみなること實に近し。若悟性と理性として二個の能力なりしならんには必ずや其一器官の代りに二個の器官ありしなるべし。

(三) 吾等の認識は直觀を絶えず概念の下に包攝し行くこと也。吾等は直觀より思惟に又た思惟より直觀に移り行く時に別に困難あるを感ぜず又た其の間にとぎるゝ所あるを感ぜず。是事たる其等が若二つの別器官に分配せられ居りたらんにはあり得べきに非るべし。

(四) 吾等が廣く人類及動物界を見渡す時は智力の發達は腦に集中する神経系統の發達と同步調を保てるを見るべし。腦が完全に形づくられ居るにつれて悟性はいよゝゝ活潑に其の本分を盡して外界よりの觸發に反應し、又其反應の產物

たる直觀はいよゝゝ明に認識主觀より別れ從ていよゝゝ獨立に即いよゝゝ客觀的とたる。——植物には認識といふべきもの無し。植物は外來の觸發に反應す

(反應は常に自發的なり)といふことなく、むしろ外來の影響の儘に變動する也。動物に於ては影響と變動との二要素相分る。動物は外來の印象に對して反應す。

されど唯己を事物と區別する爲めに、換言すれば己と事物との(並に幾分か事物相互の間に空間的、時間的及因果的連絡を與ふる爲めに要する)丈反應するのみ(七六) 参看。動物はなほ其時々々の印象に由て全く支配せらる。人間は之と異りて事物に自由

に相對するを得、事物は從て對象となり客觀的となる。是に於てか主觀的にはわれといふ意識生じ換言すれば意識は自己意識となり、又客觀的には直觀に自由に對するを得るが故に智力は其の要素たる特徴に分解し後者を更に概念に結合し、かくて理性の作用は成立する也。

(九五) さればよくゝ元まで窮むれば、同一反應能力が一段々々と昇り行きつゝ、或は悟性の直接的適用として主觀の變動と外界との關係を、或は悟性の間接的適用として外界の對象間の關係を、或は判斷力として直觀と概念との間の關係

を與ふる也。判斷力は概念を相互に而して畢竟は直觀と結び附くる連帶にして特殊より普遍を形づくとと普遍に特殊を包攝するとの二つの働き方あり。理性よりして判斷力の能力を引去る時は記憶のみ殘留す。記憶は主として抽象的表象を再現するものにして従て動物に於ては微弱なり。

第十九章 提要。

〔九六〕 智力は既に證明せし如く動物の有機體の一部分にて(後に明になるが如く)身軀の諸器官と同じく全く意志の道具なり。されば靈魂即意志の如く形而上的又不滅なる者に非して身軀と同じく物理的にして滅ぶるもの也。されど智力は元來事物の深邃なる意義本質に對して全く盲なれば其が不滅ならぬとて決して悲むべきに非る也。然のみならず智力は其の形式に由て雜多即差別といふことを造り出す者にして従て私慾や不和の源をなす者なれば、地上の生活の罪深き事は智力の存在と密接に關係せりといふべき也。

〔九七〕 人間の智力は全然渾一的の器官にて二の官能を有す。(一)表象を産出する官能。悟性及判斷力は之に本づく。(二)表象を再現する官能。記憶及び想像

は之に本づく。想像の記憶と相異する點は其の像が再現なりてふ意識を伴はずして來り従て直觀世界より自由なるが故に又現在と何等の(空間的時間的及び因果的)連絡を有せざるに在り(直觀世界に於ては過去は現在と連絡せり)。是れ想像が美術に對しては價值あるも實際生活には却て無價值なる所以也。

第二十章 人間と動物。

〔九八〕 内外の兩知覺は吾等と動物とに共通なり。而るに吾等は唯其等兩源より吾等の認識を引き來る。従て認識の内容に於ては吾等は動物に優ること殆ど無之といふべき也。吾等の長處は實に直觀的認識に他の形即ち概念の形を與へ直觀的を變じて抽象的となすにあり。

〔九九〕 是の差別は打見たる所左程にもなき如くなれど腦髓が性質上及び分量上に最高の發達をなして始めて生ずる者也。無數の種類動物は一も其に接近だになし得ず其を卓越する者の如きは何者も無之なり。——人間と動物との相異點は概念の能力即ち理性に存すれば、人間の生活に動物のと根本的に異なる特色を與ふる者は皆其の能力より來るに非るなし。

〔一〇〇〕 動物は直觀的認識にのみ制限せらる。直觀的認識は若干の記憶像を除きては直接に現在するもの、外は包含せず。何となれば現在するものと不在なる者過去及將來に屬する者との連絡は概念の助に由てのみ表象せられ、而して是は動物の缺如する所なれば也。されば動物は唯現在に於てのみ生活すといふべき也。現在即今といふことは奔流の如く絶えず彼を過ぎ行き彼れの記憶中には唯僅かの像残留するのみ。是其の眼界の極めて狹隘なる所以也。

〔一〇一〕 人間は大いに趣を異にす。彼は絶えず忽ちにして去り行く現在中より肝要なる部分を取り出し其を概念に固定し、かくて若干の範疇の下に雑多極り無き直觀世界を包括す。是の如くにして吾等は動物に於けるが如くきれく記憶像の代りに概念に於て過去の連絡ある意識を有するに至る。吾等が現在の直觀の狹隘なる範圍外に尙ほ現在せざる際限なき雜多の者を支配し思惟及動作に際して其を顧慮するは全く概念に由て也。吾等は又其に由て將來の十分の九を豫料す。其豫料が事物の實際の進行に適合せざるは極めて罕なり。

〔一〇二〕 かくして吾等の眼は世界の全体に向ふ。世界全体を方法的に排列

したる概念の一体系に模寫することは凡ての經驗的科學の目的也。されど其と同時に吾等は生活の苦多く果敢なきことを明に知るに至る。死は動物に於ては死時の到來して始めて氣附かるものなれど吾等に於ては常に目前にちらつきて絶えず吾等を脅かしつゝあり。又苦痛が來りはせぬかと氣遣ふ苦しみの方實際の苦痛よりは更に苦しきもの也。是の二の事は吾等を驅て哲學に向はしむる者也。印度の見に従へば哲學は存在の凡ての苦痛の醫藥也。プラトーンの見に従へば死に對する準備也。

〔一〇三〕 概念の能力に由てのみ個人並に多數人協同の秩序あり設計ある動作はあるを得る也。吾等が人生を保護し又は裝飾する凡てのもの、美術學問といひ教育といひ國家といひ權利といひ法律といひ農業といひ工業といひ商業といひ皆其能力に基せざる無し。一言を以てすれば吾等が自然と區別して、人文といふ者即ち人間の生活をして動物のとしかく徑庭あらしむる所の者は皆實に其能力に基する也。されどかゝる装置は動物には全く無之く從て若し現在にのみ限られたる智力の外に何者も生活を導くものなからんには將來の如何に大

いなる危難といへども知るに由なかるべく存在の安全を保持すること不可能なるべし。然るに幸にも動物は少しも認識なきに拘らず恰も認識を以ての如く働く自然に由て嚮導せらるゝ也。自然の是の援助は即本能(*instinct*)なり。是の重要な事實に就ては後に論ずる所あるべし。

〔一〇四〕 動物の動作は全く直観的現在の動機に由てのみ規定せらる。是れ其動作が底までも見え透き決して吾等をして其の動機に就て疑を抱かしむる事なき所以也。人間に於ては抽象的動機加はり爲めに動作に先ちて商量し種々の動機の中に就て最強なる者を選択し決断することあるに至る。人間は常に最強の動機に従て動作する者なれば動機は見るべからざる者なりとて決して動機無きには非ず。——抽象的概念に従ての動作は理性的又は合理的(*Rational*)と稱せられ實に人間の特色をなすもの也。人間の権力は現在の印象より自由になり(概念に由て表象する)全体を顧慮してわが動作を導き行くの度に従て増進す。されば世間に於て権力を得る者は理性の發達宜しき者といふべし。されど性格の道德的價値は如何なる動機が意志を規定するかに存し決して動機が作用する形

式の直観的なるか將た抽象的なるかには存せざる也。

本講義は認識論、自然哲學、美哲學、倫理哲學の四部より成るべき筈なりしが、都合によりこゝに第一部と共に稿を終らざるを得ざるに至りしは講者の遺憾とする所なり。されど認識論は哲學に於て最も根本的なる從て最も重要な且つ最も困難なる科學なれば、讀者にして講じ了りたる丈をよく讀み碎き理解し得るに至りなば他の學科に就ての著書を讀みて甚しき困難を感ずるやうのことはあらざるべし。

62
388

哲學概論

終

早稲田教一

哲學とは何ぞの事か。此の問に答へんと欲するに當りては、
 先づ哲學の範圍を定めねばならぬ。然るに哲學の範圍は、
 歴史的に變遷するものにして、其の變遷の程は、
 社會の發達の程度に依りて異なる。蓋し社會が未だ
 幼稚な状態に在りては、其の知識の中心は、
 宗教に在り、宗教が其の知識の中心を占め、
 社會の生活を支配する。然るに社會が發達し、
 科學の知識が盛んになると、科學の知識は、
 宗教の知識を排して、其の中心を占め、
 社會の生活を支配する。蓋し科學の知識は、
 宗教の知識に比して、
 客観的であるから、
 社會の生活を支配するに當りては、
 科學の知識が中心となる。然るに科學の知識は、
 社會の生活を支配するに當りては、
 科學の知識が中心となる。然るに科學の知識は、
 社會の生活を支配するに當りては、
 科學の知識が中心となる。

終

